

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 11 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20720108

研究課題名（和文）バリ語山地方言の構造的特徴と社会言語学的実態の調査

研究課題名（英文）Linguistics and Sociolinguistics research on Mountain Balinese Dialect

研究代表者

原 真由子（HARA MAYUKO）

大阪大学・世界言語研究センター・准教授

研究者番号：20389563

研究成果の概要（和文）：

インドネシア・バリ州で話されているバリ語の2大方言の1つであるバリ語山地方言を対象に、ブレレン県プダワ村の調査をもとに、もう一方の方言であるバリ語平地方言との対比の視点から、基礎語彙を調査し、方言学的に重要な構造的特徴（音韻構造、語彙特徴）を明らかにすることができた。また、主に面談調査に基づき、その地域の社会言語学的実態を考察した。さらに、言語構造と社会構造の相互作用に関わる言語現象であるコード混在（コードスイッチング）に注目し、山地方言話者の会話資料を収集・記述し、バリ語平地方言とインドネシア語のコード混在のメカニズムと対比する観点から、分析を開始した。

研究成果の概要（英文）：

Mountain Balinese Dialect is one of the two distinctive dialects in Balinese. This study examined dialectologically crucial structural characteristics (e.g., phonological structure, lexical characteristics) and presented a basic vocabulary of Mountain Balinese Dialect spoken in Pedawa village, Buleleng from the viewpoint of comparison with the other major dialect, Lowland Balinese Dialect. This study also examined sociolinguistic situation in the village mainly based on interviews. In addition, natural conversations by Mountain Balinese Dialect speakers were collected and transcribed, and the mechanisms of the Balinese-Indonesian codemixing (codeswitching) phenomenon found in their speech were analyzed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会言語学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：言語学、社会言語学、方言研究、バリ語、インドネシア語

## 1. 研究開始当初の背景

インドネシア・バリ州を主な使用地域とするバリ語には、平地方言と山地方言の2大方

言が認められる。平地方言はバリ州都デンパサルなどの都市部を含むバリ島平地部で主に話され、圧倒的に話者数が多く、標準方

言とされている。一方、山地方言は未開発の山村部で話され、話者数は少ない。

言語構造的には、2つの方言は、(i) 語彙の変異に加え、(ii) 音韻論(語末の母音制限)、(iii) 敬語体系およびそれに関わる語彙(山地方言は有さない)の3つの観点から分類が可能である。

研究の蓄積の面では、やはり平地方言を対象とするものが大多数を占め、山地方言については非常に少ない。バリ人現地研究者によって行なわれた、バリ語方言地理学研究として山地方言を調査した Bawa (1983), Denes et al. (1982) があるが、これらの研究以降、山地方言を扱った研究はほとんど途絶えてしまっていた。

およそ四半世紀たち、それらの研究で取り上げられた方言の分類に使うパラメータを精査・検証し、新しい観点も導入しながら両極の方言の実態を解明する必要がある。特に、山地方言は、平地方言および国語インドネシア語との接触の増加によって、標準方言化の徴候やインドネシア語の混在(借用・コードスイッチング)が見られ、社会言語学的な変化を知る貴重な機会であると同時に、純粋な山地方言の言語構造を記録する最後の段階であると思われた。

山地方言の調査研究を再起動するにあたり、すでに私自身が行なった平地方言についての研究の基盤があり、山地方言との比較対象として用いることができる用意があった。

例えば、上記の(ii)の音韻論の解釈の問題については、原(2001)でバリ語平地方言の母音の音韻論解釈を提案しており、それは方言間の母音制限を考察するための開始点となる。(iii)に関しては、原(2006)で平地方言の敬語語彙の分類の再検討をしている。また、(i)と(iii)の問題に関わる語彙については、平地方言の中核語彙のデータベース構築を行っていた。さらに、平地方言の会話に見られるインドネシア語の混在のメカニズムや分布の傾向についての考察も行っていた(原 2007 など)。

このような平地方言の語彙構造、敬語体系、コード混在(コードスイッチング)に関する研究の蓄積によって、平地方言との比較の視点から、山地方言の研究を進めることができると見込まれた。

## 2. 研究の目的

バリ語方言研究にとって非常に本質的にも関わらず四半世紀もの間十分に調査されていなかったバリ語山地方言を対象に、言語学的・社会言語学的調査研究を実施する。それによって、多数派の平地方言地域だけでなく、少数派の山地方言地域も含めた、バリ語言語社会全体の理解を目指す。主なトピックは以下の3つである。

(1) 現在のバリ語山地方言の方言学的に重要な構造的特徴を、主に語彙調査を通じて、もう1つの方言であるバリ語平地方言と対照しながら、明らかにする。

(2) 山地方言地域の社会言語学的実態の諸側面(領域や話し相手ごとの使用言語変種、言語態度など)を、面談調査に基づき、解明し、記述する。

(3) 言語構造と社会構造の相互作用に関する言語現象であるコードスイッチング(コード混在)に注目し、バリ語平地方言とインドネシア語のコードスイッチングのメカニズムに関してすでに私自身が提案している仮説の有効性を、バリ語山地方言話者による会話資料を用いて、この方言の特徴をふまえた視点から検証する。

## 3. 研究の方法

まず、先行研究では山地方言の分布について見解が相異なっていたが、どの見解でも山地方言分布としている地域に含まれるバリ州ブレレン県バンジャール郡プダワ村を、現地調査地として選んだ。そこでの現地調査を4年間にわたり平均年1回実施した。

上記の(1)については、既存の基礎語彙表(Suparman 1997、アジア・アフリカ言語文化研究所1966/1979)に基づき、バリ語山地方言の語彙調査を行った。山地方言語彙の収集・記述をおこない、平地方言との比較の観点から、山地方言の音韻構造、語彙特徴を分析した。また、山地方言の音韻構造の解明には、聴覚音声学的アプローチも使い、インドネシア語を話すことができるバリ語平地方言話者とバリ語山地方言話者の二言語話者を対象とした聴覚音声学実験を実施した。

(2)に関しては、まずプダワ村の人口統計を入手し、分析した。その分析結果や収集し得た社会言語学的情報をもとに、調査票を作成し、被験者を選出した。直接被験者に面談する形で質問に答えてもらった。

(3)は、随時得られる機会を使って、会話資料の録音による収集を行った。また、面談調査後は、その結果に基づき、(i)バリ語平地方言とインドネシア語の混在が起りやすい会話、(ii)それらの混在のない山地方言のみの会話を収集した。それらの会話は、山地方言話者とともに書き起こしを行った。

## 4. 研究成果

(1) 上記の1つめの問題については以下の2つがあげられる。

①約1000項目のバリ語山地方言語彙を収集・記述した。そして、平地方言と対比しながら、山地方言の音韻構造と語彙特徴を明らかにすることができた。その考察の一部は、以下にあげる雑誌論文①として発表した。本研究で蓄積したプダワ村の山地方言語彙デ

ータベースは、今後項目数を増やしたり、他の地域の山地方言調査を行ったりといった、山地方言語彙データベースの基盤として今後も発展させることができる。

②また、音韻構造については、聴覚音声学の観点からも考察した。インドネシア語を話すことができる、バリ語平地方言話者とバリ語山地方言話者の二言語話者を対象とした聴覚音声学の実験の結果、2つのバリ語方言間の音韻構造の違いと聴覚の相互関係があることを指摘し、それについて1つの解釈を提案した。その解釈は、雑誌論文②と学会発表②で発表した。

(2) 上記の2つめの課題については、約60人のプダワ村住民に面談調査を実施し、その結果に基づき、バリ語山地方言地域の社会言語学的状況を考察した。バリ語山地方言・平地方言・インドネシア語の使用領域や話し相手による使い分け、言語態度を明らかにすることができた。この成果は発表に向けて準備しているところである。これまで山地方言地域の社会言語学的実態について報告はなく、これによって、バリ言語社会全体の社会言語学的状況を理解することが可能になる。

(3) 上記の3つめの会話資料の収集とその分析については、次の2つを行なうことができた。

①散発的に偶然得られた機会を使って会話録音を行った。その他に、面談調査の結果に基づき、(i)バリ語平地方言とインドネシア語の混在が起りやすい会話、(ii)それらの混在のない山地方言のみの会話の大きく2種類の会話を収集し始めた。まだ十分な数ではないが、インドネシア語・バリ語平地方言のコード混在の程度が異なる複数の会話録音を得ることができた。それらを書き起こし、インドネシア語、バリ語平地方言、バリ語山地方言の音韻構造の違いや敬語情報を含む枠組みで記述をすすめているところである。そして、この会話資料をデータとし、バリ語山地方言話者のコード混在(コードスイッチング)のメカニズムや分布の傾向を、バリ語平地方言と山地方言の構造的差異(音韻構造、敬語体系など)に注目しながら、考察を開始している。

②そのバリ語山地方言のコード混在(コードスイッチング)現象の比較対象となる、バリ語平地方言地域における平地方言とインドネシア語とのコード混在についての分析を進め、2つの業績を発表した。1つは、統語構造、談話構造、敬語使用の観点から多面的にその二言語のコード混在現象を考察した単著である(図書①)。2つめは、バリ語(平地方言)とインドネシア語のコード混在現象が起きるメカニズムについて、バリ語敬

語使用とバリ社会の変化に注目し解釈を提案した論考である(図書②)。これらの論考で明らかにしたバリ語平地方言話者の会話におけるバリ語(平地方言)とインドネシア語のコード混在のメカニズムは、山地方言話者の会話におけるバリ語(山地方言)とインドネシア語のコード混在の特徴を明らかにする上で重要である。

(4) さらに、(1)、(2)、(3)の個別のトピックとは別に、バリ語山地方言地域を含むバリ言語社会全体の理解に必要な、バリ州におけるバリ語の言語政策についても調査した。これまでのバリ語に関する政策を、主にバリ語会議、州条例、バリ語教育から考察することによって、バリ言語社会を支える重要な側面である公的・法的な側面を明らかにした(図書③)。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

① 原真由子、2010、「バリ語山地方言の語彙資料」『アジア・アフリカの言語と言語学』、査読有、4巻、pp. 259-296

② 原真由子、2010、「聴覚音声学の実験に基づくバリ語平地方言/a/の解釈」『大阪大学世界言語研究センター論集』、査読有、3巻、pp. 247-260

[学会発表](計2件)

① Mayuko Hara, “Balinese Language in Globalization Era”, International Seminar on Balinese Language in Globalization Era, 国立ヒンドゥガルマ大学(インドネシア・デンパサール市)、2012年3月20日

② 原真由子、「聴覚音声学の実験に基づくバリ語平地方言/a/の解釈」、日本音声学会、九州大学、2010年9月27日

[図書](計3件)

① 原真由子、2012、『インドネシア・バリ社会における二言語使用-バリ語とインドネシア語のコード混在』、大阪大学出版会、297p

② Mayuko Hara (分担執筆)、2012, “Language and Social Hierarchy: Interaction between Balinese-Indonesian Codemixing and the Use of Balinese Honorifics”, (eds.) Keith Foulcher, Mikihiro Moriyama, Manneke

Budiman, *Words in Motion-Language and Discourse in Post-New Order Indonesia*, National University of Singapore, pp. 153-172

③ 原真由子 (分担執筆)、2012、「バリ語の政策の変遷と今後の可能性」、砂野幸稔編、『多言語主義再考-多言語状況の比較研究』、三元社、pp. 430-464

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

原 真由子 (HARA MAYUKO)

大阪大学・世界言語研究センター・准教授  
研究者番号：20389563